

随順化する自然

— 金魚（ナンキン・トサキン）飼育の改造技術 —

野 地 恒 有

一、金魚飼育にみる改造技術—自然の随順化

金魚飼育にみる改造技術とは飼育の過程において形状を変化させる技術のことである。固定された品種のなかでの改造であり、新品種を作出しようという改造ではない。改造により理想体を具現化しようとする金魚飼育の様態を「嵌合」と命名した。金魚の飼育とは、固定された品種のなかで、理想体に嵌合しようとして改造する技術のことであり、金魚の観賞とは、その嵌合の度合いを評価することである。

金魚を飼育する立場は、①一般家庭で飼育する者、②熱心な愛好家として自家で採卵・孵化・育成して優秀な金魚を飼育する者、③販売・出荷を目的として大量に金魚を飼育生産する者に大別される。本稿でいう飼育は②の立場からとらえている。②では、金魚全般を飼育しているのではなく、金魚のなかで限定された特定の品種を飼育している。それに対して、①は、本稿の意味からすると飼育ではなく、観賞のためにただ生きなが

らえさせているだけの行為である。

③は経済的活動であり、①や②は文化的活動である。①と②は生活のなかに取り込まれた自然を対象とする文化的活動である。そして、飼育・観賞の心意が、①では「癒し」とか「なごみ」としてとらえられる。しかし、②の心意は「癒し」や「なごみ」ではない。②は改造する・改造されないという金魚と人間の緊張関係に基づいた活動といえよう。それは「癒し」や「なごみ」とは対極に位置する。この緊張関係は、飼育者の頭に描かれた理想体に自然を嵌合させたいという欲求、嵌合し得た喜びに支えられている。金魚飼育にみる改造とは、自然を人間に寄り傾かせ、自然を随順させる技術のことである。つまり、自然と人間の関係からいえば、②は、自然の人間への随順化とまとめられる。そのことからいえば、「癒し」や「なごみ」であらわされる関係とは、人間が自然に寄り傾き、自然に随順することである。つまり、自然と人間の関係からいえば、①は、人間の自然への随順化とまとめられる。

金魚の飼育・観賞のほかでは、盆栽にも理想体に嵌合しよう
と改造する技術がみられ、そこにも自然の随順化が指摘できる。
それに対して、熱帯魚やガーデニングの植物の飼育・栽培およ
び観賞は、それらとは異なる。熱帯魚やガーデニングの植物は、
改造された自然物ではない。自然物がそのまま生活の中に取り
込まれているのであり、いわば、断片化された自然物である。

二、ナンキン飼育の改造技術聞き書き

ナンキンとは、島根県出雲地方を中心に飼育されている金魚
の品種名である。ナンキンの飼育について、改造技術を中心に
聞き書きをまとめよう。話者は、出雲市のYMさん（昭和二五
年生まれ）、MYさん（昭和二八年生まれ）、THさん（昭和二
二年生まれ）である。

ツクリの技術

魚の形が出たら、そこからはツクリだね。ツクリが八割。ツ
クリが入ってくるのは、体の色、尾や腹の形。

■このツクリが飼育の改造技術である。改造技術の民俗語
彙はツクリである。

掛け合わせて出てきた魚が悪かった場合、オヤが悪いからと
いうことにならない。飼っている人の腕が悪いということであ
る。先天的には体長の長い魚がおもに出るが、長い魚を長いま

まに育てる人もあれば、長い魚を完成された形に育てる技術を
持った人もいる。短い魚を途中で長くする人もある。もって生
まれた先天的なこともあるが、決して自然のままなことではな
い。人工的な部分、人間の手が加わっている部分もたくさんあ
る。とぎすまされて、奥が深くて、楽しすぎて、やった分だけ
返ってくるというのが楽しい。

■金魚飼育のツクリとは、「人工的な部分」、「人間の手が
加わっている部分」のことである。そこが「とぎすまされ
て、奥が深くて、楽しすぎて」という、金魚飼育の核心部
分である。つまり、自らの技術の前に自然が寄り傾き、自
然が随順化する快感に支えられている。癒しやなごみとは、
逆に、自然の前に人間が寄り傾き、人間が随順化する快感
のことである。

理想の姿

ナンキンは第一に体形である。口が小さくて、上から見て、
口先から腹にかけて直線できて、腹がボールの形になっている。
口から目まではメサキというが、メサキは長い方がよい。目幅
が狭くメサキが長い。アケ三歳のナンキンの理想の姿は、「ボ
ールの抱きかかえ」である。腹の横張りのことをハラダシとい
う。腹が下へ出るだけでなく、上から見て横へ出ているのがよ
い。上から見て逆三角形の腹である。これを「かかえ込む腹」
とか「腹を抱き込む」という。上から見て逆三角形で、ボール

を抱きかかえているような体形である。このダキカカエがないといけない。この体形の線をダキコミセンともいう。

体色では白が大事である。ナンキンの魅力は、優雅というか、優美というか、三歳くらいは白の光沢が大事である。三歳くらいはナンキンの銀鱗の背の輝きはほかの品種にはない美しさがある。セビレがないということ、銀色のウロコの輝きが特徴である。老化してくると輝きが出てこない。これをさびが出てくるという。寿命は八年くらいで、一二年くらいまで飼ったという人もいる。

■この理想形のなかで、自分の作りたい魚をとにかく頭に書けるようにすることが大切であるという。このことをコノミザカナをもつという。頭に描かれた抽象的な理想像（コノミザカナ）に嵌合させて具象化するのが金魚の飼育である。

ナンキンは女性美を想像させる浮世絵美人にたとえられている。背中にばーんと赤があるよりも、腰から下に赤がある方がよい。これをカノコという。白地に点々とカノコにあった方が上品である。

■「スマートな力士」にたとえる人もいる。

ツクリの技術（形）

孵化した稚魚は生まれて二週間くらいすると形が出てくる。腹の形から、ミジカテ、チュウヨウザカナ、ナガテザカナの三

種類に分けられる。ミジカテはだめで、選別する。チュウヨウとナガテでどれを取るかは個人の好みである。チュウヨウザナはだいたい四、五年でできあがる魚であり、ナガテは六、七年かけてできあがる魚である。

腹が出てくる丸形の魚をマルテという。体長の長さがあり、尾筒が長いものをナガテという。飼い方によって、マルテにするとか、長くするとか、これ以上長くしないととかということをする。大きいところか狭いところかの飼い方で形の違いが出てくる。小さいところで多く入れて飼えばマルテができる。腹が出てくる。広いところで数を少なくすれば、ある程度の長さは出てくる。長さが出れば大きくなる。広いところで飼えばゆつたりとして長さが出てきて大きくなり、腹も出てくる。どんな大きな池でも五匹以上入れたらだめだといわれた時代もあったが、現在ではそうはいかない。

短い体形の魚を長くしたり、長い魚を短くするのは、池あたりの匹数と餌づけ、運動量で決まる。狭いところにたくさん入れたら運動量は少ない。狭いところにたくさん入ると、餌はよく食べる、競争してよく食べる。しかし、成長はしない。成長しないということは、背中が高くなって、腹も大きくなるということである。競争させないと餌を食べない。しかし、数が多すぎると、目幅がふくれたり、メサキがなくなったり、よくない結果が出る。

イトメ（イトミミズ）をナンキンの餌とするのは、魚の顔を

細かくするためである。イトミミズは水の中に入れると丸くなるから、それを一本引つ張った力で顔を細かく、メサキを長くしていくと、昔の人はいつていた。顔を細かくするというのはメサキを出すということである。

朝早くにイトメ取りに行った。針金で作ったもので川でイトメをとって、泥といっしょに持ってきて、発泡スチロールの箱にそれを入れる。水は捨ててへドロだけ入れる。その上に五ミリくらい砂を撒く。一センチくらいの幅に切った画用紙を敷いて、そこにまた砂を撒く。そして二四時間くらいすると、イトメが画用紙の上に出てくる。今ではイトメはとれなくなつた。

開きが大きすぎる尾をキツイオという。この尾の場合には、深池（ふかいけ）に入れて水流をかけてやる。開きのない尾をヤオオといひ、浅水（あさみず）に入れて水流をあげない。当歳魚では、一冬超したら、尾の形がだいたい固まつてくる。ナンキンにはセビレがないが、セビレが出てくることもある。これをホタテという。一本ぴーんと帆が出ているように見えるからである。これはセビレの名残である。センゾガエリである。ホタテは除去する。センゾガエリとして、フナオが出てくることもある。

ツクリの技術（色）

ナンキンの体色が真珠色に白くまばゆく光るには、循環池ではなく、ヒライケで飼つた方がよい。循環池では白が少し濁つ

てくる。ヒライケとは箱の池のことで、水の循環はない。地べたを掘つてそこからコンクリートをたたいてあげた池をタタキ池という。水を循環させないなら、二、三日に一回は水替えをしなければならぬ。池が大きくなると、水替えがたいへんである。ナンキンにはきれいなサラミズが必要である。アオミズに入れておくと体色の赤の方が強くなる。

できれば池を二つもつておいて、一方をきれいな水にしておいて、一方が汚れたら魚ごと移動して、汚れた方をきれいに洗つてきれいな水をためておくというようにすれば、ナンキンも大きくなるし、腹も出てくる。しかし、池の数にそれだけの余裕がない。

人工調色

人工調色のことをイロヌキという。品評会に出す魚（ヒンビヨウカイギヨ）にイロヌキをおこなう。タネオヤはイロヌキをやつてもやらなくてもよい。

戦前から受け継がれてきたナンキンの規格は、頭は白で、ロクリンギヨがいちばんよい。ロクリンギヨとは、口、奴（エラ）、ひれ、後ろに赤が出る魚のことをいう。そうした色合いが自然で出てくるというのはむずかしい。白と白を合わせても赤い魚が出てくる。そこで人工の着色をする。着色といつても、赤いところを取っていくわけである。赤を取ることをクロスという。しかし、口、奴（エラ）、ひれ、後ろに赤が出るロクリンシヨ

クは絶対的な条件ではない。

イロヌキには酸氣を使う。塩とか梅酢とか酢系統のものを使っておこなう。塩は、細かい赤が出てほしいとか、カノコ模様になってほしいときに使う。赤の多いところをとばしたりするときにはアラジオを使う。梅酢にも少し塩を入れていいる。頭部分の赤をクロスときには梅酢を使う。目があるので頭には筆を使って梅酢を塗る。酢も頭に使う。よい具合にとれたが、さらに一点だけ残ったところの赤を取りたいというときには梅酢を使う。天候の加減、温度の加減、塩の加減でイロヌキの具合が変わってくる。

四月の終わりに生まれた魚は七月中旬から終わりの頃に色が黒く変わってくる。これをイロガワリという。そのときにイロヌキをおこなう。体が黒くイロガワリした魚は赤系で赤が多くなるなので、イロヌキをする。頭には全体に塩や酢をつけ



写真1 人工調色に使う塩と梅酢

る。肩にあたる部分の一番高いところ（ここをボンタクという）についた色ははげにくいので、イロヌキには気をつけなければいけない。尾の先が白くはげている魚は白系なので最後まで何もせずに見届ける。その場合、頭の部分の赤が残るので、それをあとで取る。

イロヌキのあとに赤が残ることをハゲモドリという。ウロコの下に赤がある場合とない場合やウロコだけが赤の場合があり、ウロコの下に赤のある場合、ハゲモドリが出る。頭には赤が出るものである。

三、トサキン飼育の改造技術聞き書き

トサキンとは、もともと高知市を中心に飼育されていた金魚の品種名である。トサキンの飼育について、ツクリの内実を中心に聞き書きをまとめよう。話者は、広島県福山市のOHさん（昭和三十二年生まれ）である。

理想形

体が丸くて尾が大きく、円のなかに入る、これが理想のトサキンの形である。ワタリ（上から見た左右の幅）の長さと同様に口先から尾の先までの長さが同じで、円の中にはいる。

よいトサキンは、メサキがあつて目幅がない、とがっている顔である。トサキンの顔は秋分の頃から変化して引き締まっ

くる。そのほかに、ハラガカリ（腹の形）とウロコのみめの細かさである。

尾のマエ（オヤボネ）が一八〇度を開いているトサキンが、品評会で上位に行く。しかし、マエボネが一八〇度に来ているほど、泳ぎは下手である。トサキンはうまく泳げない魚である。サイドブレーキを引きながら、泳いでいるようなものである。オヤボネをしなやかに曲げて泳ぎ、止まると尾の返しが出てくる姿が美しい。これを「尾を絞って泳ぐ」という。

品評会では、当歳（その年に生まれた魚のこと）の色は関係ない。また、カジオの本数も問題とされない。トサキンではカジオの本数は見ない。カジオは二本がよいとされるが、品評会では問題にされない。

選別

トサキンの中でも、高知のタイプ、東京のタイプがある。高知型とは、尾の返しが大きいが、体のふくらみがないということ、口からエラのラインで腹まで来ていて腹が丸く出ていないということ。体の丸い（マルテ）のが東京型である。

人工授精で、同じメスにいろいろなオスを掛け合わせるが、そのオスごとに鉢に分ける。オスの数を多くして、いろいろな掛け合わせを作る。メス一匹に対して、オス三匹から五匹の掛け合わせを作っている。四〇ハラくらいとる。当歳はずっとマル鉢で飼う。マル鉢で飼うので、どんどん選別して、数を減ら

していかなければならない。

生まれたてのサカナをハリコという。餌にはシユリンブを与え、一〇日後にはようじくらいの太さになっている。ようじくらいの太さになったら、選別をする。尾の角度が六〇度から九〇度のものを残す。この角度のものは少ない。一一〇度くらいのもが多い。よいものを取って、悪いものを流す。一回の選別で一鉢で五〇匹くらいにする。一すくいの中から一〇から二〇取る程度である。一鉢のなかによいものがなければすべて流す。その後、一週から二週間の単位で選別を繰り返す。二回目では三〇匹くらいにする。捨てるものがないときには、二鉢に分けることもある。ストローくらいの太さになったら、餌にミジンコを与える。

小さいときの選別で尾の開きが一二〇度くらいのものを残すと、九月頃には一八〇度を超えてしまう。一八〇度を超えたらトサキンは泳げなくなる。初心者は開きがないといって六〇度から九〇度の尾を全部捨ててしまう。ランチユウは最初一二〇度くらいのをよしとするが、この角度で残すとトサキンはすべて開きすぎになる。開きすぎると、九月頃に下に一回潜っていつてまた上昇して来るという泳ぎをする。これを「V字飛行」と呼んでいる。サイドブレーキが極限までかかった状態で泳ぐようなものである。それは選別の失敗である。

一回目の選別を九〇度の尾の開きでとっていくと、たくさん金の魚が残る。そこからいろいろな欠点が出てくる。主な欠点

は、カタハラ、オシンのつまみ（オシンが尾翼のように分厚く上がつている）である。二回目の選別では、オシンにくっきりと黒い筋が入っているのは、まずつまんでいる。オシンは小さいときには見えるか見えないかであるが、そのときにくつきりと入っていると、つまんでいる。このころはまだトサキンの形になっていないときで、どういう種類の金魚の稚魚かもわからないくらい時期である。オシンのつまみで大量にはねられる。ある程度成長してトサキンらしくなりつつある頃に、今度はカタハラが出てくる。ハリコから三週間すると、ウロコが生え始める。腹が出てくるとトサキンの姿になってくる。カタハラとは、片方の腹が丸くて、片方の腹が四角である形のことである。左右で腹のトマリの位置が全然違う。それははねる対象になる。マルテのカタハラというのは改善されてくる。二歳以降になるとほとんど直ってくる。ナガテのカタハラは直りにくく、ずっと欠点として持ち続ける。ナガテというのは、高知系の金魚に濃く出るタイプである。

民俗遺伝学

マルテで尾が大きいタイプが品評会に向くのだが、それでもナガテを残すのは、マルテどうしを掛けていくと、尾筒がどんどん詰まっていく。ひっくり返りやすくなる。泳げない金魚になっていく。それと、マルテどうしを掛けていくと、尾が小さくなっていく。尾の大きさを維持しつつ、体の丸さも維持した

かったら、どうしてもナガテを掛けていってやらないといけない。マルテとナガテを掛けると、ナガテがたくさん出て、マルテが出ないときもあるが、それでも中断するからだが丸くなって、ころころした形の金魚になってしまふ。まん丸の体で大きな尾ではバランスが悪くて泳げない。結局ナガテも維持していかなければならない。

トサキンは、高知以外では、ナガテとマルテの間にナカテというのがあるが、ナカテ・マルテがトサキンでは評価が高い。ナガテは評価が低い。高知型の金魚は腹が出ないといったが、そのタイプでは異常に体が長いとか、異常に体が小さいというものが出てくる。体が小さい場合、うちわが泳いでいるように見える。尾ばかり大きくて体がうちわの柄のような形である。逆に、体が長い場合、尾も大きい体も長いからフナが泳いでいるようである。円の中にはいるというのがトサキンは理想であるが、体の長い金魚は円の中に入らない。フットボール形の楕円にはいる。非常に長くのびてしまったものを、短くしていくのはむずかしい。

高知型の長いタイプに丸いタイプをかけても、あまりに形が違いすぎるので、接点がなく歩み寄っていけない部分がないので、どうやっても、長いタイプばかり出てくる。その血が非常に強いから。たとえば、一〇〇メートルの選手とマラソンの選手がいっしょに五〇〇メートルを走るようなものである。一〇〇メートルとマラソンの選手には接点がないと思う。極端に違う競

技をいっしょにはできない。トサキンも極端に長いものと極端に丸いものはいっしょにしても、融合しない。私がやり始めた頃、三年くらいはほとんど高知型の金魚が出た。マルテとナガテをかけているが、ほとんど長い体でつまみやカタハラばかりが出てくる。ほとんど処分しなければならなかった。それが、五、六年してから、マルテとナガテを組み合わせた成果が出てきた。腹にふくらみがあつて、尾の大きい金魚がやつと出た。最初の頃にはまだ数は少なかったが、徐々に年を重ねることに、増えてきて、今はコンスタントにかなりの数で、こういう形が出るようになった。品評会というだけで考えれば、全部この形で行けばよいが、しかし、血を固めない濃くしないとということから、形質の違いのものも作っていくことが大事である。同じタイプどうしの掛け合わせをやるとうすく血が濃くなってしまふ。一年二年はよいが、それを何年も続けていけば、必ず金魚は退化していく。形が崩れていく。タイプが違う中でのよい金魚を作り出すということが一番大切であり、心がけていることである。

産卵させるにあたって、極端に言えば、AタイプからGタイプまであれば何十種類の組み合わせができる。AとBだけだったら、三タイプの組み合わせしかできない。しかもAとA、BとBという組み合わせは近親になるのでまずい掛け合わせである。掛け合わせのヴァリエーションは多いほどよい。いつもAとAとか、BとBとやっていると、血は濃くなっていく。メン

デルの法則では説明できないようなことが、金魚では起こる。大量に不良魚が出るということ自体が、メンデルの法則に沿っていないということだと私は思う。何でそういうことになるかという点、先祖がフナであることに尽きる。原種は野生で、それを人工的に作り上げたのが金魚である。先祖返りということが金魚では絶えずおこなわれるし、それがどういう形で出てくるかわからない。

マル鉢

トサキンの飼育では、当歳を、エアレーション（空気を水中に入れて水流を起こすこと）をかけないで、マル鉢を使うのが特徴である。そのため、水替えが必要である。当歳のトサキンは、サラミズ（エアレーションをかけない水）のマル鉢で飼う。このようにして飼うのは、金魚ではトサキンだけである。



写真2 マル鉢

エアレーションをかけると、水流が起きて、尾のカエシに悪影響を与えるといわれる。カエシとは尾の反転のことである。カエシが大きくてエラまでかかるのが、本当のトサキンの姿である。いまでは、めつたにでなくなった。

■九月初旬の水替えの様子を見た。マル鉢は六〇個くらいある。直径約六〇センチメートル、深さ約二〇センチメートルのすり鉢状の容器である。一五時から二時間かけて水替えをおこなった。鉢からトサキンを出して、鉢の表面に付いたコケを掻き落としながら、栓を抜いて水を捨てる。ワイヤーブラシでコケをかき取る。一鉢に五匹くらい入っている。秋にはさらに選別をして三匹くらいにするという。水を汚いままにすると、尾にガス（気泡）がたまる。コケから気泡が出て、この気泡が尾につくと、尾が内出血する。ガスをほうっておくと、尾がバリバリに切れてしまう。水をきれいにするとガスは直る。水替えには井戸水を入れている。井戸水をタンクに入れて一日おく。井戸水をそのまま入れることはない。井戸水の水温は一七度くらいで、酸素がない。飼育水と同じ温度か、若干低い温度の水で水替えをする。飼育水が三〇度であれば、水替えの水は二五度から二八度くらいがよい。三〇度くらいの水を入れると、トサキンはコケを食べず、機嫌が悪くなる。

マル鉢は、全部自分で作ったが、FRPで作った元型を高知の人が貸してくれて、それにモルタルを流し込んで作った。マ

ル鉢をそろえることによってトサキンをブリーディングしていくということが始まる。もちろん、プラブネでもブリーディングできるが、本当の意味でのトサキンの形にはなりにくい。本当のトサキンの形、きめというものを求めるならば、このマル鉢は絶対にはずせない。だから愛好家が挫折する。マル鉢はセメントで作つてあるから、持ち運びは非常に困難である。以前には室内で飼っていたが、室内飼育ではトサキンはできにくいので、外に鉢を並べて飼っている。冬場のオフにマル鉢を每週一個ずつ作つていって、少しずつ増やしていった。トサキンはよいものを求めるならば、スペースがいるし、時間があるし、エアレーションをしないから毎日水替えをしなければならぬ。エアレーションしないということは、酸素量は減るばかりだし、自然の風で酸素が水の中に飛び込むだけが頼りの飼育である。水の汚れも早い。毎日の水替えができるかどうか。ポイントである。生産ということを考えれば、ものすごく非効率的な金魚である。多くの人は育つたトサキンをプラブネで育てている。

マル鉢には全部栓が付けてある。この栓は高知の人の発明であると思う。栓を付けるような元型だったので、それで水替えができる。栓がなかつたら水替えはたいへんな作業である。重たいマル鉢をひっくり返さなければならぬ。体力がいる。

夕方になるとトサキンがマル鉢の縁をぐるぐる回る。その泳ぎがトサキンのオヤボネを作る基礎になる。当歳の時にプラブ

ネに入れて飼育すると、その泳ぎがない。最低二ヶ月このマル鉢で飼わないと、トサキンらしい形になってこない、なりにくい。マル鉢の代替のものとしてプランターも使っている。プランターなら市販されていて安い。一個九八〇円で買った。九八〇円ならばガラス水槽よりも安い。プラブネよりも安い。底をくりぬいて、そこに栓を接着剤で貼り合わせた。形状はマル鉢と同じである。ただ違うのは、プラスチックなので、空気を通さない。モルタルというのは、不思議な力があって、息をしている。空気が通る。非科学的といわれるかもしれないが、金魚を同じように作っても、マル鉢のほうができがよい。顔を細く、シャープに作るということにおいては、モルタルの鉢の方が上である。なぜかはわからないが、高知の人は、表面がざらざらしているので、顔をこすると痛いから顔が引き締まるんだという。コケが生えれば表面はつるつるするので、それが正しいかどうかはわからない。ただ、マル鉢についてはいろいろな説があつて、プランターと比べて水温の上下動が激しいともいう。激しく上がるが激しく下がる。プランターはゆっくり上がつてゆっくり下がっていく。プランターは、温度が上がるとなかなか下がらないということ。積算すると、プランターの方が高温の中で金魚は生きなければならぬということ。夏だと、平均して三〇度超えた水温で一日を過ごすということになる。モルタルの鉢だと、積算すれば二八度くらいで止まっていると思う。プランターからもよい魚が出るが、その場合秋になつたらモル

タルのマル鉢に移す。そうすると顔がきれいになる。プランターでは顔が汚い、悪いということではないが、マル鉢のほうがよりよいものになる。

マル鉢で飼わなければトサキンらしいものができないということも科学的に証明しろといわれてもできない。しかし、私より倍以上年数やっている人たちが口をそろえて、このマル鉢を使わないといふトサキンができないという。そして、エアレーションは絶対だめだという。

科学的には証明できないが、マル鉢のなかでトサキンは縁をぐるぐる回っているといつた。円はエンドレスである。直線は必ず出発と終わりがあがるが、円は出発と終わりがない。マル鉢のなかをトサキンは一時間でも二時間でも回っている。ときどきやめるが、また、思い出したようにぐるぐる回る。なぜかわからない。餌を探しているという人もある。たしかに餌を入れたら泳ぎをやめて食うが、でも食い終わつたらまた回りはじめる。しかも餌は縁に置かないし、そこに沈んでいるので、餌を求めているのではない。縁を回るだけでなく、タテに底に向かつて泳いでいて、また向こう側に向かつて、またぐるぐる回つたりもする。このマル鉢のポイントは、泳ぎの終わりが無いということ。突き当たるところがない。プラブネだと、まっすぐ泳いでいけば角に必ずあたる。マル鉢には顔をおつけるところがない。そういうことがトサキンの形を作る上で重要だと思ふ。

マル鉢を作るときのセメントと砂の比率も重要で、セメント一に対して砂が三から四が理想である。セメントの量をごく少なくして、砂をたくさん入れて作っている。マル鉢には表面がざらついたものと、つるつるのものがある。ざらついた鉢は金魚のできが非常によい。つるつるのものは何年たつてもだめである。表面をざらつかせるのは、ヒヨウサクサンという薬があつて、これを入れるとざらつきが出る。つるつるの鉢はざらつきを出しても、もともとセメントの比率が高い作り方をしているのでよい金魚ができない。このへんが通気性という点だと思ふ。水がにじんでいる証拠に表面にコケが生えている。通常あふれる水だけではこういうコケはつかないと思ふ。にじみ出るからああいうコケがつく。にじみ出てコケがつく鉢が金魚のできがよいとはいえる。だから、セメントの鉢が息しているというとなんな馬鹿など、ふつうの人がきいたら思うが、こうやって水がにじんで出ていることはやはり空気が通っているということである。

太陽をできるだけ当てて、雨水も入れてやる。雨水はよくないが、強い金魚を作るという意味では、雨水は大切である。ただ、雨水が入ったら早めに水替えをしなければならぬ。水が異常に汚れるから。ペーハーの極端な変化がある。ランチュウのようにほとんどハウスや温室で飼育していれば、雨水が入ったらペーハーが極端に変わって、それだけで死ぬ金魚がたくさん出る。この飼ひ方が強い体質を作る。

とても奇妙な容器で飼うという特殊性のある金魚だから、ほかの金魚とは同一には考えられない。このマル鉢というものがトサキンの飼育には欠かせない。これがあるなしではトサキンのできが全然違う。ただトサキンを作るのであればプラブネでも何でもいくらでもできるが、でも本当の意味でのトサキンはこのマル鉢がないとむずかしい。非効率な飼ひ方をしないとよい金魚にならないということが前提にあるから、これまでトサキンの普及はむずかかった。

これだけ鉢を置いていても、いろいろな形のトサキンを飼つていても、よいトサキンはほんの一握りである。それだけ確率が非常に低い金魚である。だから、一般の人がトサキンを偶然一〇匹ぐらい手に入れてやったら、それは違う。うちのレベルと同じ金魚ができるかといったら、それは違う。だから、トサキンは入りにくい世界である。トサキンのプロも存在するが、プロであつてもよいものではない。アマチュアであればよいものができるというわけではない。

トサキンの飼育の立場からいえば、先に大別した①がここで語られた「一般人」であり、②が「アマチュア」であり、③が「プロ」となる。本稿で取り上げた話者の方々は、みな②の立場である。②の立場の方々は、品種の維持や保存という社会的な役割も担っている。

ランチュウは血筋というものが確立してきているから、この種とこの種をかけてやれば、ランチュウの理想形がある程度の

確率で出てくる。トサキンも形は出てくるが、理想形を作るということがむずかしい。たとえば、ブンジョウウしてくれという人がいるから、ハリコの状態で持つて帰らせる場合がある。そういう人はメールで画像を送つてきてくれたりする。うちの系統はよそにいつてもある程度の形になるが、そこから理想形の金魚にするのはむずかしい。

■ブンジョウウ(分譲)とは魚や卵を有償で分けることである。分譲により飼育者間の関係が作られていく。

餌

餌をしつかりやつて大きくするということを「飼い込む」という。トサキンは飼い込んではいけない。体を大きくしないと勝負にならないからといって、餌をやりまくる。調子が悪いときに餌をやれば、調子を崩して死んだりする。その死因が餌のやりすぎであると気づかない。きのうまで調子がよかつたのに死んだと、一言で片づける。原因は何かと追求しない。原因は必ず餌の餌のやりすぎである。

たとえば、イトミミズで飼育すれば、これは天然飼料だから、イトミミズを食い過ぎて金魚を殺すということはない。ミジンコも食い過ぎて殺すということはない。ただたくさん入れて、水が汚れて死ぬということがある。シュリンプから切り替えたときには、どんなにやつても、一日小さじ一杯くらいしかミジンコをやらすが、これを昔の飼い方では茶碗一杯くらい入れ

る。それは昔の飼い方だが、ミジンコは単為生殖してコムシを産む。そのコムシを食わせて大きくするという方法だが、昔の稚魚の餌の選択肢としてシュリンプはなかったので、ミジンコを大量に入れるので、ミジンコも大量に酸素を消費して、金魚が酸欠で死ぬということがわからない。餌をやりすぎて、水を替えないと、金魚が酸欠で、エラがめくれてしまう。これをエラメクレという。さらに、カタエラを閉じるという状態になると金魚は危険である。シュリンプからはじめて、その後小さいミジンコ、徐々に大きいミジンコというやり方でやれば順調に育っていく。

ミジンコの良さは、適度に入れてやれば水が汚れにくい。過剰に入ればミジンコは死ぬから、返つて水は汚れるが、適度に入れてやれば、淡水性のもので、二、三日くらい生きるし、その間に金魚も食べるので、生きている間のミジンコは食物連鎖で汚れを食ってくれる。ちょうど一石二鳥である。だから、ミジンコ飼育をしている間、水替えは一週間か二週間に一度でよい。稚魚が小さい間、水替えが非常に困難である。そういうときに水替えしなくてもよいので、ミジンコ飼育は合っている。

これがイトミミズ飼育になると、水がものすごく傷む。イトミミズはタンパク質と脂肪のかたまり。イトミミズを水に入れたら、体が固まろうという性格がある。そうすると、トサキンが顔を振つて、ちぎる。ちぎるということは、断面がで

る、断面からラードのような油が出てくる。水温の高いときに油が水面にいつぱい浮く。それで水がいつぱんに傷む。油は水を非常に傷める。ミジンコは油も出ないし、傷みが非常に少ないが。イトミミズは金魚を大きくするために、非常に有効な餌である。一番すぐれた餌である。その代償に水がすごく汚れる。イトミミズを与える段階は人それぞれである。たとえば、シュリンプの次からやる人もいる。その場合長いイトミミズは食べないので、カッターで刻んでやる。かまぼこ板のようなものにしてミンチにしてやる。その時点で水が汚れる。入れた瞬間から水が汚れる。水替えがたいへんである。その代わり、イトミミズを与えると魚の成長がよい。トサキンの顔はイトミミズでできるといわれている。

私は、シュリンプの後、一ヶ月くらいはミジンコで行く。早く成長するようであれば、二週間ぐらいでミジンコをやめて、イトミミズをやる。基本的にミジンコは最低一ヶ月はやりたいと思っている。体ツクリにミジンコは欠かせない。とくに尾筒という部分を作るには、ミジンコがないとできない。太い尾筒はできない。結局、トサキンは大きな尾を持つているので、尾筒がしっかりしていないと、尾がついてこない。尾筒がしっかりしているから尾がついてくる。太い尾筒を作るために、稚魚の時にミジンコを与える。ランチュウの餌もミジンコというが、その点ではランチュウと同じ。ランチュウもあの太い尾筒があってこそ迫力があって、品評会で評価される。だから、ミジン

コを与えている。私はミジンコは生きたものしかやらない。ただ、最近の環境ではミジンコは捕れにくくなっている。

大きくしたい金魚は、小さい金魚の中に大きいのを入れると、よく食べて大きくなる。逆にすると小さくなる。餌にシュリンプを稚魚にやると、一、二週間で金魚のサイズがそろろう。そして、ミジンコに切り替えると、魚体の大きいのが大きいミジンコを食べて、大きくなる。成長に差が出てくる。

参考文献

ナンキン関係

出雲なんきん愛好会 一九九八 『出雲なんきん』

島根県立宍道湖自然館ゴビウス 二〇〇三 『金魚・銀魚・

鉄魚 宍道湖自然館第五回特別展「金魚・銀魚・鉄魚―
いづもナンキンのルーツを探る―展示解説」

中尾英一 一九七九 「出雲ナンキン」『研修』一二 島根

県立平田高等学校

中尾英一 一九八九 「文化財としてのイズモナンキン」

『山陰中央新報』八月二十八日

トサキン関係

田中國衛 一九九四 『土佐錦魚の美―蘇る幻の名魚―』緑

書房

中部土佐錦普及会 二〇〇二 『土佐錦魚会報』二

東京土佐錦魚保存会 二〇〇三 『第二七回東京土佐錦魚保

存会会報』

土佐錦魚愛好会 一九九〇 『あゆみ』二

トサキン保存普及会 一九九三 『土佐錦魚』一三

日本金魚普及会 一九七七 『トサキンの飼い方』 日本金魚

普及会

野中進 一九九三 『土佐錦魚』『高知新聞』二月一日〜八

月二日

矢野城桜 一九七六 『土佐錦魚の四季―その飼い方と歴史

―』

*本稿は、平成一六年度科学研究費補助金・基盤研究(C)

(2)「観賞用動植物の飼育・栽培の改造技術にみる伝承的
特徴に関する民俗学的研究」の成果報告(一部)である。